

トヨタカローラ中京

KUO
GROUP



SUPER FORMULA **LIGHTS** RACE REPORT

Rd.12/Rd.13/Rd.14 @SUZUKA CIRCUIT

TEAM
TOM'S

天候：晴れ・ドライ / 気温：12-13℃ / 路面温度：12-14℃

2020年シーズンも最終盤に差し掛かり、残すイベントは今回の鈴鹿戦、第12、13、14戦と最終イベントの富士戦のみとなった。ランキングトップの宮田莉朋が駆るカローラ中京Kuo TEAM TOM'S36号車は、この鈴鹿戦で最終イベントを待たずしてチャンピオンを獲得できる可能性がある。そのためにも第12戦と第13戦の決勝スターティングポジションを決定する予選は重要だった。宮田の最大のライバル50号車の阪口晴南選手とのポールポジション争いは、阪口選手に両レースのポールポジションを奪われる結果となってしまった。それでもフロントローからスタートして優勝を目指す。37号車の小高一斗は、3番手グリッドから両レース決勝をスタートすることとなった。



- 8時15分から30分間の予選セッションが行われた。ベストタイムで第12戦、セカンドベストで第13戦のグリッドを決する。
- 路面温度が低い早朝のセッションで宮田は1セット目のタイヤで1分49秒台に突入した。しかし、阪口選手が同じく1セット目で宮田のタイムを0.15秒ほど上回っていた。
- 残り時間9分を残して2セット目のタイヤを装着して宮田はコースイン。3周目、4周目に1分49秒199、49秒428を記録。しかし、阪口選手はベスト、セカンドベストともに宮田を上回っていた。
- 小高は第12戦予選で宮田のタイムに0.091差に迫る1分49秒290を記録したが、チームメイトの前に位置することはできなかった。第13戦の予選タイムも小高は49秒台に突入。49秒台のタイムを叩き出したのは、小高を含むトップ3のドライバーのみだった。
- なお小高は予選前日の練習走行中、エンジントラブルに見舞われ、エンジンの交換を強いられたために、第12戦は5グリッド降格されてスタートする。

Driver

Car No.

Qualifying for 12

Qualifying for 13

宮田 莉朋	36	P2 1'49.199	P2 1'49.428
小高 一斗	37	P3 1'49.290	P3 1'49.801

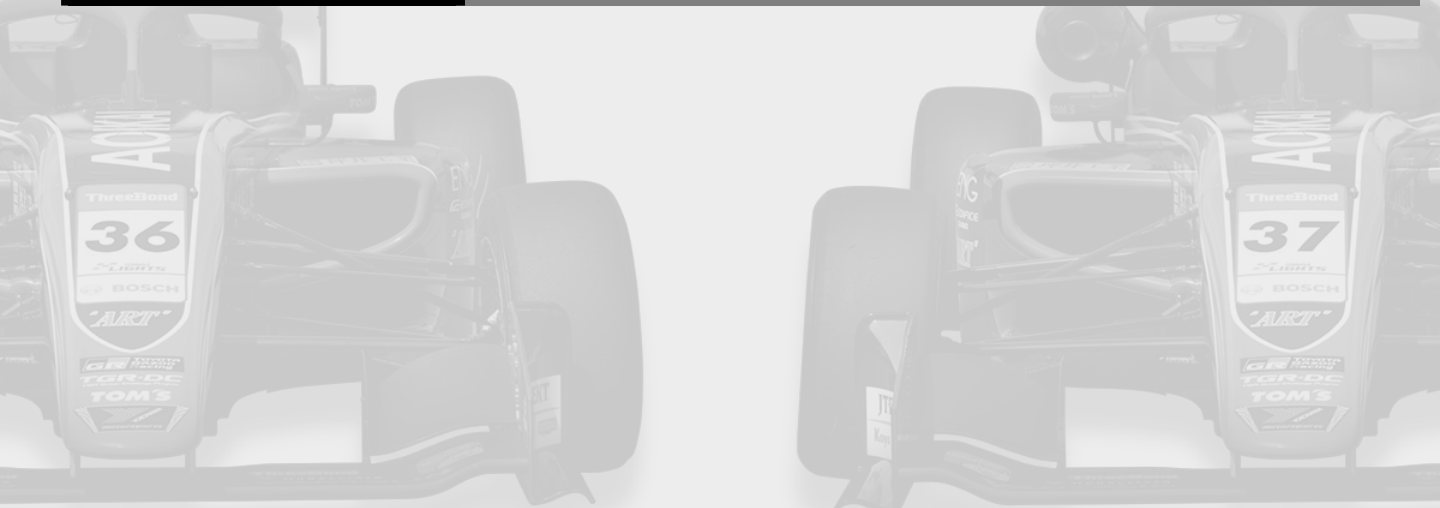
天候：晴れ・ドライ / 気温：12-13℃ / 路面温度：12-14℃



練習走行と比べてマシンのバランスが全然違っていた。そしてブレーキングでマシンが全然止まってくれなかった。練習走行では、そんな症状は全く出ていなかったのに気にならなかったのですが、予選を走り出した瞬間からマシンが変わってしまい、その原因は何だったのかが分からなかったです。フロントのブレーキがロックしてしまって、リヤだったら何とか騙し騙しコーナーを曲がって行けるのですが、フロントだとコーナーの奥まで行って攻める走りが全然できなかったです。ブレーキングの初期からロックしてしまうのでどうしようもなかった。タイヤ交換の時にセットアップを変えてもらったのですが、症状は完全には改善できなかった。練習走行と比べて路面温度がとても低かったし、ハードブレーキングのヘアピンとかシケインでの風が追い風だったというのも影響しているかなと思います。でもヘアピンでブレーキがロックするとシケインでもロックしてしまうという意識があって、全然攻められなかった。ヘアピンよりシケインでのタイムロスが大きかったですね。結果を出せなかったのはチームに申し訳なかったと思います。決勝では勝って、早くチャンピオンを決めたいと思っています。



今回はトップや莉朋選手とのタイム差が少なかったなので、これまでとは違った予選だったかなと思います。ヘアピンなどのタイトなコーナーで、もう少しマシンが曲がって欲しいところがありました。思ったように曲がってくれていたら、もっとタイムアップできていたので、ポールポジションも獲得できていたかなと思うと悔しさが残ります。予選のタイムでは両レースで3番手でしたが、金曜日の練習走行でエンジンが壊れてしまって交換したので、そのペナルティとして最初の第12戦は、5グリッド降格の8番手の位置からのスタートとなってしまうので、何とか追い上げて、少なくとも3番手、できればもっと上でフィニッシュして第14戦のスターティンググリッドを上の方にしたいです。予選のタイムを見てもボクを含めて3台は他のドライバーとタイムが違って、当然ペースも違うので、他のマシンと絡むことなく順位アップしたいです。



天候：晴れ・ドライ / 気温：12-13℃ / 路面温度：12-14℃



チーフエンジニア

吉武 聡

今回も練習走行の段階から僅差で阪口選手との争いになりました。そして、昨日まで出ていなかったフロントブレーキのロックという症状が出てしまって、攻めきれなかった予選でした。症状はほんの少しだと思うのですが、それが影響してタイムが伸びなかったようです。1セット目から2セット目のタイヤを装着する際にセットアップを変更して、ブレーキロックの症状が出ないようにしたのですが、やはり出なかったとしてもそれが気になってしまうと、コンマゼロ何秒か遅くなってしまいますね。阪口選手が1セット目、2セット目共に宮田のタイムを上回ってきたのですが、彼が速かったというよりも、こちらのタイムが伸びなかったという状況でした。ライツの予選は早朝なので、タイヤのウォームアップも難しいし、とても重要なのですが、タイヤグリップも100%ではなかったようです。小高のタイムもとても良かったです。トップ2に肉薄してきています。彼からマシンが曲がらないというインフォメーションはありますが、あれだけのタイムが出ているので十分に機能しているかなと思われます。あとはドライバーに任せます。



監督

山田 淳

今までここ鈴鹿では経験したことのない低気温、低路面温度のもとで走らなければならぬ予選でしたから、想定外の事が起こった。タイヤの温め方、マシンのセットアップが攻めきれない原因となったのでしょうかね。ブレーキングの時にタイヤがロックしてしまったということも、タイヤと路面温度との問題で、ブレーキ本体の問題では無いと思います。ライバルの阪口選手は鈴鹿が得意という点でも、アタックラップをうまくとめてきましたね。練習走行の段階から、今回も彼と宮田の戦いになるのは分かっていましたし、我々独自のプランで予選はポールポジションを狙っているわけですが、チームとして最後の詰めが甘かったです。小高は最初の第12戦で後方からのスタートとなってしまいますが、予選の位置（3番手）に戻って来てフィニッシュするのが彼のミッションですね。

京ア



天候：晴れ・ドライ / 気温：18-16/12-14/16-15℃ / 路面温度：24-23/12-13/28-23℃

カローラ中京Kuo TEAM TOM'S36号車の宮田莉朋は、第12戦に好スタートからトップを奪って快走、オープニングラップから2位以下を引き離す得意のパターンに持ち込んで優勝。2020年シーズンのチャンピオンに王手をかけた。しかし第13戦でスタートに失敗、そしてレース半ばにまさかのスピンアウトでリタイア。鈴鹿でのチャンピオン獲得に黄色信号が点灯してしまった。迎えた第14戦は、ポールポジションからトップを堅持してフィニッシュ、今季10勝目をマークしてチャンピオンを決めた。37号車の小高一斗は、3位、2位、3位で全てのレースで表彰台を獲得した。また、カローラ中京Kuo TEAM TOM'Sは、宮田のドライバーズチャンピオンに加えてチームタイトル、そして株式会社トムスはエンジンチューナータイトルも獲得した。



●第12戦のスタートでは最もイン側のラインを走行しながら、1コーナー手前でトップに立つことに成功。その後は得意のパターンで周を重ねるごとに2位以下を引き離して12週のレースで11秒5の大差で優勝。小高は4位でゴールラインを切ったが、2位の50号車、阪口選手がペナルティで降格して3位となった。この結果で第14戦のグリッドが決する。

●第13戦は、小高が抜群のスタートで2位へ。その背後に宮田がつける展開となった。レース半ばで宮田がデグナーカーブ1でスピン、コースアウトしてリタイア。小高は順位を守って第2戦以来の2位フィニッシュを果たした。

●第12戦の結果によって宮田はポールポジションからスタート。トップに立つと終盤はマシンをケアしながら周回して優勝。これによってベスト13戦の有効ポイント制によってチャンピオンを決定した。宮田はスーパーフォーミュラライツの初代王者となった。

●第14戦において小高はスタートで2位へ順位アップしたが、2周を残して3位へ後退してフィニッシュ。



Driver	Car No.	Rd.12/ Fastest Lap	Rd.13 / Fastest Lap	Rd.14 / Fastest Lap
宮田 莉朋	36	P1 1'50.714	R 1'50.771	P1 1'51.475
小高 一斗	37	P3 1'51.737	P2 1'51.145	P3 1'51.943

天候：晴れ・ドライ / 気温：18-16/12-14/16-15℃ / 路面温度：24-23/12-13/28-23℃

**36** / ドライバー

宮田 莉朋

まずは、チャンピオンを獲得できてほっとしています。この4年間長かったなとあらためて思います。昨年は自分がどうすることもできない車両規定の問題でチャンピオンを取ることはできなかったし、今シーズンはコロナ禍で春から全く走ることができなかった。ようやく夏から走ることができましたが、準備も十分ではなかったと思います。第12戦は勝ちましたが、第13戦でスピンしてリタイアするという人生初めての経験もしました。第14戦では頭を切り替えてレースに臨みました。トップに立って、2位とのギャップが築けてからはトラブルが起らないように、あまり攻めすぎないようにマシンとエンジンを労わりつつ気持ち的には6割くらいの感じでフィニッシュを目指しました。勝ってチャンピオンを決める事ができて良かったです。サポートしてくれたチームやスポンサーさん、そして応援してくれた皆さんに、やっとチャンピオンになれたことに心から感謝します。来シーズンはできれば一つ上のカテゴリーにチャレンジしたいです。ありがとうございました。

**37** / ドライバー

小高 一斗

第12戦は考えていたように3位まで上がれて、第13戦はスタートが決まってその時点でポジションも上げられて、出だしのペースは阪口選手に負けていなかったです。そしてタレバですけれど、スタート直後の1コーナーと2コーナーで阪口選手にもっとプレッシャーを与えられていたなら展開も違ったかなと、でも攻めすぎて2コーナーで膨らんでしまったら莉朋選手に抜かれてしまうので、いろいろ考えました。レース中にトップに立てるチャンスがあるかなと思っていたのですがダメでした。第14戦は莉朋選手の後ろで走行していて、差が少なくなったなと感じていましたが、記者会見で＜マシンを労って6割くらいのペースで走っていた＞と聞いて、そんな状況の彼をパスできなかったことが悔しかった。阪口選手に差を詰められて最後は抜かれてしまったのですが、コースコンディションがまだ良くない状況では阪口選手や莉朋選手には負けないペースで走れるのですが、ラバーグリップが良くなったり、コンディションが良いと負けてしまうのが課題です。今回マシンをセット変更で良くするのではなくて、自分のドライビングで何とかしようと頑張ったのですが、まだ課題は残ります。



天候：晴れ・ドライ / 気温：18-16/12-14/16-15℃ / 路面温度：24-23/12-13/28-23℃



チーフエンジニア

吉武 聡

宮田はまず第12戦で勝ってくれたのですが、第13戦でリタイヤしてしまいました。スタートで遅れて、前の小高を追っていて、ダウンフォースが無くなってしまって、コーナリングラインが膨らんで、スピン状態になってそのままコースアウトしてしまったようです。そのレースと同日の午後に行われた第14戦ですから、それを意識しないというのは無理でしょうが、レース前には、勝ってチャンピオンを獲て来てくれと声をかけて送り出しました。トップに立ってからは2位とのギャップもコントロールして、トラブルが出ないように攻めすぎないように万全を期して優勝、そしてチャンピオンを獲得してくれました。小高は、第13戦で素晴らしいスタートからとても良いペースでラップしていました。宮田とか阪口選手のレベルに一步近づきました。もう一步レベルアップすればトップを走る事ができますね。セットアップの能力を含めて、宮田にあって小高にない部分をもっと鍛えてもっと速くなってもらいたいですね。



監督

山田 淳

第13戦で宮田に何が起こったのか、タイムスケジュールがタイトな中で事細かに聞いてはいたのですが、彼から＜自分のミスでスピンしてしまったので、第14戦に向けて頭を切り替えて頑張ります。＞とだけ聞いていました。そして勝ってくれましたね。本当に頑張って走ってくれました。4年間このクラスで走って、去年は車両規定で失格していなければ1ポイント差でチャンピオンを獲れていたのにそれがダメだった。彼の速さは誰もが認めるし、チームとしてもトムスは強いと思われている中で、チャンピオンを獲得するというプレッシャーは、もの凄かったと思いますが、それはね除けて成し遂げてくれました。スピンアウトでリタイヤした後に勝ってチャンピオンになれたのですから、これからの宮田莉朋に期待したいです。小高は、第13戦がとても良かった。彼のベストレースでした。スタートも良かったです。しかし、第14戦の最後に順位を落としてしまったのは、大きな課題です。彼に求めているレベルは高いです。でもそれをクリアしてもらわないといけません。

